

名古屋第二赤十字病院 佐藤 公治院長インタビュー

佐藤 公治（さとう こうじ）
1958年生。徳島大学医学部卒後、名古屋大学整形外科医局長、名古屋第二赤十字病院整形外科部長などを経て2012年から副院長。西浦マリーナヨットクラブ会長。国際ヨットレースに参加したこともある。

患者さんに優しく寄り添う 凜として品のよい病院にしよう

「八事日赤」の名で市民から信頼され、親しまれている名古屋第二赤十字病院の新しい院長に整形外科医佐藤公治さん（六十歳）が就任した。「国際的にトップレベルの医療の質」と国際機関から認証されたばかりの八事日赤だが、「患者さんにもっと優しくより添える病院を目指す」とさらなる高みを目指す。（聞き手／中部財界フォーラム社代表取締役塚本隆）

—— 第一回ノーベル平和賞受賞のスイス人アンリー・デュナン氏が提唱したと伝わる赤十字の理念とは何か、その設立の経過も含め改めて教えてください。

佐藤 名古屋第二赤十字病院へは一九九年前に名古屋大学から赴任し、赤十字の精神について学び直したというのが実情で、崇高なその精神に改めて感動しました。よく知られていることですが、スイス人の実業家アン

リー・デュナンが一八五九年、イタリア統一戦争の激戦地で敵味方の区別なく負傷者を助けたのが始まりです。デュナンはジュネーブに戻り「傷ついた兵士はもはや兵士ではない。人間であり、人間同士として尊い命は救われるべきで、そのための救護団体を各国で組織し、国際条約を提携しよう」といった主張を著書で展開し、ヨーロッパで大きな反響を呼びます。そして六四年にジュネーブ条約が結ばれ「国際赤十字組織」が誕生。この時、デュナンの祖国スイスに敬意を表しその国旗の色を逆にして赤十字の旗に採用されたのです。

一方日本では、七七年の西郷どんが参加した西南戦争で明治政府

軍、反政府軍ともにおびただしい死傷者が出ます。実際に傷病兵の救護にあたり、救護組織の必要性を痛感した佐野常民、大給恒という二人がヨーロッパにできたばかりの赤十字と同様の救護団体を作ろうと思い立ちます。「博愛社」という救護団体はこうした経過で誕生した熊本が日本赤十字発祥の地となっています。

—— 国際的医療認証機関JCI（Joint Commission International）から今年三月「医療の質と安全とサービスについてトップレベルの病院」という認証を受けられました。東海三県では初、国内では二五番目です。病院が掲げてこられたホスピタルミッション、モットーが認められたということですね。

佐藤 当病院に期待され、信頼されているのは高度な医療であり、救急医療です。加えて国内外での災害医療救援という使命もあります。それらに応えるにはJCIの評価も含めて質の維持が大事です。職員が二〇〇人もいますから「患者さんのために」という共通の意識を持つことに腐心して

います。

—— その具体策は？

佐藤 医師、看護師含めみんなプロです。しかし、ともすれば周りが見えなくなるということもあり、そこは基本に戻って、やはりJCIのような外部評価を受けることが意識の共有化に有効だったと思います。JCIでは、医療安全、感染対策など一四分野、約一二〇〇項目にわたり審査を受けました。多国籍の審査員の訪問を受け、それは厳格な審査でした。しかも三年に一度、更新のための審査があり、さらなる「カイゼン」を求められています。患者さんのために必要な改善活動が日常的な業務の中で習慣化するよう努めています。JCIの評価ポイントには、接遇とか笑顔で患者さんに接するというようなホスピタリティとかサービスといった項目は少ないのですが、私はこうした面も大事にしたいと職員の皆さんに呼びかけています。

—— 最近の国際医療活動について教えてください。

佐藤 赤十字の国際救援にはい

ろんな分野があり目立つのは災害医療救援ですが、紛争地域でも活動しています。内戦しているシリアやヨルダンにも人を送っています。直近ではインドネシアの地震ですね。地震や津波など災害救援・救護活動には、たくさんNGO、NPOが支援活動に入りますが、赤十字の場合は一カ月単位で長期に行きます。事前にセミナーを受けた者を派遣します。成田とドバイに医療資材が置いてあり、いつでも迅速に派遣できるような態勢をつくってあります。

—— 院長ご就任の抱負を改めて語ってください。

佐藤 国は高度・専門医療と身近なかかりつけ医を分けようという基本方針があり、当病院も数年前に紹介状がなければ診察を受け付けないという厳格なやり方を採用しました。ところが、患者さん側にしてみれば、自分の症状が大きな病院に行く必要があるのかどうか判断がつかない面もありますし、いままで診ていただけたのになぜ、といった反応もあり、このことで地域からは少し冷たくなっ

たのではと受け取られた側面もありました。そこで私は原点に戻り、やはり「患者さんに寄り添う優しい病院にしよう。そして凜として品の良い病院にしよう」ということを言い始めています。

—— 佐藤先生はプライベートではヨットマンとお聞きしておられます。公務多忙でなかなかその機会もないと思いますが、先生の趣味・健康法について教えてください。

佐藤 年のせいでしょうか、最近自分でも疲れやすくなったな、と思うことがあります。患者さんにはロコモ（運動器症候群）予防運動というのを呼びかけています。ご高齢になると最後は足腰のせいで寝たきりになる、そうならないために足腰を鍛えましょうと。最近、マラソンが趣味の妻のアドバイスでジョギングを始めた、自宅でエアロバイクを毎日漕いだりしています。ヨットは海に出るため、心のケアには最高ですが、やはり週末に忙しいことも多くてなかなか参加できないのがつらいですね。